

「やってみよう！科学する心×いのち真ん中社会の保育実践」報告レポート

仁川ウエル保育園 西川美奈子

はじめに…

ぐうたら村へ行くまでの私はいろんなことをぼんやりとしか知らず、深く考えたこともなかった。
この研修で実際に山や畑に入り、初めて知る様々なことに感動し、自然の巡りの中に自分も繋がっていることを感じたり、熱い思いを持った仲間に出会い刺激をもらって、自分や自分の園の保育を見つめ直す大きなきっかけをもらった。
子どもたちにあらゆるいのちを感じ、自然としての自分を知ってもらいたいと保育実践を進めてきた。

自園の自然と関わる保育

- ・畑や散歩先、近隣の山へ遊びに行く。
- ・自然物を拾ってきて遊ぶ。
- ・季節の野菜や花を植えて食べたり遊びに使ったりし、季節が終わったら片づける。
- ・虫捕りをして飼育ケースに入れて育てたり観察したりする。

自然を保育教材として考え使う保育が当たり前となっていた。

実践 バグホテルを作ってみよう！（3.4.5 歳児クラス）

場面1：みーつけた！

運動会が終わり、園庭や畑でゆっくりと遊ぶ時間が増えた子どもたち。
涼しくなりバッタやコオロギなどの昆虫に自然と目が向き始めた。バッタやコオロギを目にすると捕まえた
い一心で追いかけて始め、捕まえると当たり前に飼育ケースに入れて部屋に持ち帰っていた。



ちょうど土日の前日だったこともあり、捕まえた虫をどうするか話し合うことになった。
ずっとケースに入れていたいという思いはありながらも5歳児を中心に「かわいそうやから逃がしてあげようよ」という意見が多く、その中には「狭いところいやだと思う」「ご飯がないよ」「おうちに帰りたいと思う」といろんな思いがあった。
しぶしぶ逃がしに行ったが「お世話したかった」「飼いたかった」という思いが大きい子もいた。

場面2：虫のおうちってどんなところかな？

虫を逃がしに行く際、バッタもコオロギも同じ所へ逃がそうとする友だちを見て「コオロギはあっちで捕まえたんやで！」とM児（5歳）が声をかけはじめた。同じ虫でも違う場所に住んでいることに気づき、「なんでこっちがいいのかな？」とそれを不思議に思う様子もあった。
サークルタイムでは「あっちはあんまり日が当たらんからちゃう？」「コオロギの好きなものがあるのかな？」「何食べるんやろ？」とさまざまな意見や疑問が上がった。
そこから畑や散歩に出かけると、穴や隙間を見つけ「ここにも何か住んでるかもよ！」と覗いてみたり、草をかき分けてみたり石をどけてみたり落ち葉をめくってみたりといろんな場所で虫のおうちを探し始めた。



場面3：バグホテル??おもしろそう！

虫のおうちを探す中で、色々な虫との出会いがありナナフシなどの珍しい虫やカナヘビなどの他の生き物も見つけることもできた。子どもたちの虫や生き物への興味も高まり、保育者からバグホテルを紹介した。初めは不思議そうに話を聞いていた子どもたちだったが『虫や生き物が来てくれるかもしれない』ということに「やってみたい！」と興味をもち始めた。
さっそくS児とM児（5歳）が設計図を描きはじめ、虫の巣が載っている図鑑を開き「葉っぱがおうちやねんて！」「木もあつたらいいよね」と何を置けば虫がお家にしてくれるのかを話し合っていた。
散歩先ではみんなで考えたまつぼっくりや落ち葉・木の枝などを集めていると、3歳の子たちも実際に森に落ちているものや生えている植物を見て「これもいいんちゃう？」と材料を集めていた。



場面4：この棚めっちゃいいやん！

材料は集めたが肝心の枠組みをどうするかが決まらず、わざわざ木材を購入するのはこの実践をやっている上で何か違うという保育者の思いもあり行き詰っていた。

クラスの職員の協力もあり、施設でいらなくなった棚をもらえることになり早速園庭へ運び込むと「なにこれ？」「もしかしてバグホテル？」と嬉しそうに見に来る子どもたちの姿があった。しばらく放置されていた棚だったので所々木がめくれていたり泥がついていたり…それを見た子どもたちからは「この隙間にも何かくるんちゃう？」という声が上がっていた。

さらに見ていくと、すでに蜘蛛の巣が張られクモがいたことで「もう住んでる！」「ホテルにピッタリなんや！」と盛り上がりを見せていた。



落ち葉の部屋や枝の部屋などを分けるために棚と一緒にもらってきた古い木材で仕切りを作った。大きさを合わせるためノコギリで切って切れ端が出くると、他のクラスの子が「いいな～」と持って行きそうになっていた。するとK児（5歳）から「まだ使えるから持っていかないで！」「木が好きな虫もいるかもしれないからそれも使おう。」と声をかける姿があり、一見いらなくなった破片も使えるものとして目を向けられるようになってきていることを感じた。

場面5：どうしたら来てくれるかな？

ひとまず形になったバグホテルはどこに設置しようかと悩んだが、わざわざ見に行かなくても自然に目を向けられること・クラスの子どもや保育者だけでなく誰でも見られることを考えエントランス横の花壇に設置することにした。子どもたちに伝えと自分たちが植えたジニアの花が咲いていたり、雑草も生えているから虫がすぐ近くに来るかもしれないと期待感をもっていた。

何か虫が来ていないか、毎日の登降園時や遊びの時間に見に行ってはバグホテルの様子を気にしているが、すぐに虫が来ることをイメージしていた子どもたちは少しがっかりしている様子もある。

落ち葉や枝を足してみたり棚のすぐ隣に花壇の後を利用して土の部屋を作った。ダンゴムシがいることに気が付くと落ち葉をさらに集めてきたりもしていた。花が好きな虫が来るようにと育てているジニアを飾ってみたりと子どもたちなりに考えて工夫している。

バツタをつかまえてホテルに入れようとしている子がいるとM児（5歳）が「勝手につれてきたら意味ないんやで！僕たちと一緒に生きてるんやから！」と友だちに声をかける姿があり生命尊重の気持ちが芽生えていると感じた。



場面6：ちょこちょこ進化中…

エントランスに設置したことで毎日自然に目が向けられ、いつも誰かが気にかけている。乳児クラスの子も「むし～」と指をさしながら覗き込み、ここに虫がいるかもしれないと期待しながら覗き込んでいる。落ち葉がたまるように柵を作ったり、木の枝や木の実など何か見つけては「バグホテルに入れよっか！」と話したり、見つけた種を植えてみたりとちょこちょこ進化している。寒い時期になりあまり変化はないが、これから暖かくなり何か来てくれるかもしれない！と期待いっぱい話す姿が見られている。



場面7：生き物への興味から自然への興味へ

いろんな場所に住む色々な生き物から、食物連鎖や土の中にも興味が広がりつつある。畑で土を掘り覗いてみるとなんとも言えない香りがし、子どもたちは土の中の菌や発酵・分解のことは分からないけれど「なんかおばあちゃんちんみみたいな匂いやなあ～。」と何となくにおいを感じている。いつか、「あ～、あのにおいはそういうことね。」と繋がる日が来ればと思う。



実践を通して～子どもたちの変化～

バグホテルづくりの実践の中で子どもたちの自然を見る目に変化を感じている。

「なんかいるかな?」「この穴誰かのお家ちゃう?」「誰かが集めた種かもしれへんから置いとこっか!」と目に見えなくてもそこにあるいのちを感じている声がたくさん聴かれるようになった。

子どもたちのが命を感じる眼を持ち始めていることを嬉しく感じている。



最後に…

日々の保育や行事に追われる中で、子どもたちの興味を繋げながらこの実践を続けていけるのか、これからどうやって進んでいけばいいのだろう、と不安もあれば子どもたちと一緒に新しい経験をして感じられること、子どもたちの純粋な感性、そこから飛び出してくる言葉にときめいているという楽しさも大きい。

今、初めてのことを楽しみながら身近な自然に誰かを想像しいのちを感じている子どもたちが、その誰かを自分と同じようにとらえて、共に生きていく社会を考えられる人になって欲しいと願い、そのちいさなちいさなきっかけになるような保育をこれからもしていきたいと思っている。